

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

【授業担当者】

所属/職名: 共同獣医学部/教授

氏 名: 有村 卓朗

授業科目名	国際獣医学インターンシップC・獣医学特別研修
研修先 (大学・国・都市名)	VetAgro Sup(国立獣医学農学高等教育研究機関/リヨン獣医大学)(フランス・リヨン)
研修期間	令和 5年 1月 20日 ~ 令和 5年 2月 20日
	令和 5年 2月 22日 ~ 令和 5年 3月 8日
<p>〔研修の目的・概要〕</p> <p>1761年に設立された世界最古の獣医系大学であるリヨン獣医大学を母体とする、フランス国立獣医学農学高等教育研究機関であるVetAgro Sup(ヴェットアグロ・スーブ)での診療参加型臨床実習(クリニカルローテーション)に参加することで、世界最先端の獣医療を体験し、将来的に国際的な視野を持ち、かつ地域獣医療に貢献できる人材の育成を目的として研修を行った。具体的には馬や産業動物(主に牛)診療科での診療参加型Hands-on臨床実習(見学だけではなく学生自身が直接患者に接触し、自ら診察や手術を行う実習形態)に現地学生とともに参加し、海外における獣医学教育を受け先端獣医療を学ぶとともに、これまで行ってきた実習や診療との相違点や改善点について自らのこれまでの取り組みを含めて洗い出し、学修意欲のさらなる向上を図った。さらにはチーム医療の一員として、獣医療で必要とされる外国語(英語およびフランス語)でのコミュニケーションを研修先の教員や学生、診療に訪れる動物の飼い主ら一般の地域住民と取りながら研修を行うことで、異なる人種間で実務を遂行する上で必要な相互理解と、自らの意見を論理的に構築しそれを外国語でアウトプットするスキルの習得を目指した。また昨年夏に今回の研修先から本学部のクリニカルローテーションに1か月間参加した学生とディスカッションを行い、日本とフランスの獣医療の違いや進むべき方向性についてグローバルな視点から今後の獣医療を担う学生の立場で理解を深めることも本研修の中で実施した。</p>	
<p>〔研修の成果〕 *事前・事後学習も含む。研修の目的や学習成果の達成状況について、また地域のグローバル化や活性化に資する人材育成の観点からの成果についても記載して下さい。</p> <p>今回の研修はCOVID-19パンデミック後初めての実施であったが、長らく海外研修を行えていなかった学生の派遣による大変密度の高い研修を遂行できた。また同様の理由から研修先の受け入れに対するモチベーションも非常に高く、計画していた研修内容をスムーズに実施できたことは非常にありがたかった。本学でのクリニカルローテーションも今年度からCOVID-19パンデミック以前と遜色なく行えたことで、渡航時に必要とされる最低限の知識やスキルを既に学習しているだけでなく、本研修で既習のものに上乘せし、これまでの学びを振り返りながら海外での新たな知見を習得できたことから、高い学習効果があった。さらに各学生が異なる診療科での実習に参加し、その内容について日々相互に情報や意見を交換しながら研修を行っており、学びに対する意識の向上も見られた。</p> <p>本学は2019年6月からアジアの大学で初となる欧州獣医学教育機関協会(EAEVE)の獣医学教育国際認証を取得しているが、今回の研修はEAEVE認証校間のクリニカルローテーションの互換システムを活用して行われた。畜産が主要産業の1つである鹿児島は獣医師の社会貢献度が非常に大きい県であるが、本研修は学生が欧州で現地教員から獣医学教育を受け、世界の最先端獣医療の現状と今後の方向性を直に体験できる機会となっており、そこで得た知見を以って現在本学部附属病院や周辺の農場・牧場で行われている臨床実習の内容の改善や国際水準レベルの維持を行い、かつ地域獣医療のレベルアップにも多大なる貢献が期待される。また、2025年に予定されるEAEVE認証再審査にむけて地域獣医療機関との連携の継続や強化は必須であるが、今回の研修を含む獣医学教育の国際水準化にむけた持続的な取り組みは地域のグローバル化や活性化に資する人材育成において大きな成果を挙げている。</p> <p>また今年度県内養鶏場で頻発した高病原性鳥インフルエンザは越境性動物疾患であり、昨年来の欧州での大流行に起因する。本疾病は渡り鳥がヨーロッパ-中央アジア-ロシア-アジアという飛来経路をたどって世界的に伝播するが、今回の研修の間に現地教員から欧州での現状や沈静化への取り組みについて説明を受けディスカッションを行う機会を得た。こういった体験は越境性疾患をグローバルにコントロールすることの重要性や、国際的な視点や連携が地域貢献に大きな役割を持つことを肌で感じる貴重なものとなった。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>燃料費の高騰による欧州便航空運賃の大幅な上昇が学生の渡航を躊躇させる大きな要因となっており、かつ円安による現地での滞在経費の上昇が学生を圧迫していることは今後の課題であるといえる。</p>	